2011年12月

ESNAC便り

アジアとアフリカの子どもたちに教育をおくる会

愛をあげて、愛を知る喜びを！

アフリカ訪問特集

58号

国際協力NGO
Educational Sponsorship of Needy Asian & African Children
エスナック教育里親グループ

クリスマスと
新年のお慶びを申し上げます

2011 年も皆様の暖かいご支援を
ありがとうございました。
2012 年がより良い年でありますように！

コーディネーター・里子たちと心を合わせ、
感謝の祈りを込めて

エスナック教育里親グループ
代表　藤田文子・理事・スタッフ一同

賀正

アフリカ訪問写真

サコからコンチへ350キロの旅（車で山を超えました）

ケニアのホームで歓迎を受けました

歓迎マーチ

小学校の朝礼（サコ）

巻　頭　語

藤田　文子

ソマリア･エチオピア･ケニアの旱魃で 1,200 万人の死者が予測されると知り、今年は何があってもアフリカを訪問しなければ！と希望者 4 人と共にエチオピア･ケニアへの 2 週間の旅を決定しました。5 年前に訪問したエチオピアとは想像以上に進展していました。2 週間の短い旅でしたが、今回も多くのことを学び、本当に祝福された旅でした。幸いに**エスナックのコーディネーター、マリアの援助修道会の管轄するアフリカの地域は西北のスーダンの国境近いところと、ケニアもナイロビに近いナクルという町にあり、旱魃で苦しむところとは離れていてみんな無事でした。**

想像以上の貧しさとはいえ、**アフリカのすべての人々の生活パワーは言葉に出来ないほどのものを感じました。**会う人、すれ違う人々、車で通り過ぎる私達に外から身体全体を使った元気な掛け声！！　2 週間離れていただけなのに、日本では精力的な人々の中にさえ、何ともいえない空しさと虚弱さを感じて心が寒くなるのを感じる程のアフリカパワーを今も感じています。

どのような言葉にすれば今回のアフリカの旅を伝えられるかと少々困惑しています。同じ地球に生を受けた人間が、これ程までに異なった環境の中で、これ程までに違った生活をしていることを学べたことは、今回のように短い旅ではあってもこれからの生活に大きな示唆を与えられたと感謝一杯です。

最古の人間の化石が発見された、**アフリカで最古の文化を誇るエチオピア人**の中には旱魃や飢え、貧困の中にも気品と誇りが漂っているようでした。英国領だったケニアに較べ、イタリア領であったこと、内戦や東方教会のためか、発展が遅れているように感じました。隣国ケニアは国民の 60%以上が カトリックの国です。物価は高く、生活費に苦しんではいるようですが、目覚しい発展をしているように思えました。

エスナックの会員の方たちに今後とも変らぬご支援を今一層お願いし、自国に対する誇りや尊厳を保ちつつ、エチオピアやケニアの将来をになっているエスナックの里子達が、将来自国に大きく寄与してくれ、世界に羽ばたいてくれますようにとの夢が膨らんできました。

ケニアの社長こと フランシス君

藤田文子

インド･ムンバイのマリアの援助修道会（BOM のコーディネーター）の依頼でエチオピアの支援を始めて 11 年目のアフリカ訪問でした。旅のご報告をするに当たり、アフリカから帰国しても脳裏から決して離れないフランシス君のことを先ずお伝えすることにしました。

10 月 21 日に出発し、エチオピアの拠点を訪問し、9 日目にケニアのナクラを 4 日間訪問しました。マリアの援助修道会のアフリカ管区の一拠点としてのケニアに両親のいない子ども達のホームを設立して 3 年になります。現在 72 人の子ども達(この地球上に一人も親戚のいない)の内、40 人の子ども達は学校に入っていましたから、未就学の子ども達に迎えられました。乳児の部屋に入って一番に目に付いたのは真ん丸い顔に大きな目をした男の子でした。布団に支えられてお座りしていました。堂々とした威厳に満ちたこの子に『社長』というニックネームをつけました。まだ一歳になっていないと思っていました。食事の時間になるまで、てんでに、『おい！社長！』と呼びながら真ん丸い頭をなでていました。ところが頭を天井に向けたままきょとんとして笑ってくれません。食事の時間になり、ミルクカップに入れたオートミールを社長に飲ませようとスプーンで口に入れると飲み込むことが出来なく、だらだらと口から出してしまうではありませんか！　保母さんがやってきて社長を抱っこしたトタンにごくごく飲みました。

シスターに社長のことを伺って驚きました。2 週間前に捨て子としてポリスに連れてこられ、フランシスと名前をつけた時は骨皮で瀕死の状態だったそうです。年齢は 2 歳以上らしいとのこと。頭からだんだん肉がついてまだ下半身は骨と皮だけ。パンツを下ろして見せてもらったところ、お尻に肉と脂肪が全然無く、座ることも立つ事も、物を飲んだり、声を出すことも出来ない状態だったのです。人間は、お尻の筋肉が無ければ首も据わらず、座ることも物を飲むことも出来ないことを初めて知りました。その深刻さを露知らず、『社長！社長！』と呼んで楽しんでいたことを知り、一同恥じ入り、涙を抑え切れませんでした。(表紙の写真参照)

アフリカのエネルギーを行く先々で感じた旅でしたが、特に里子達とコーディネーター達の感謝を全身で表わそうとするパワーは表現するのが難しいほどでした。一人でも多くの里親さんを！とのコーディネーター達の願いに十分応えられない苦しさは耐えがたい思いでした。それにも増して、前回と同じく一番大きなショックはやはり治癒不可能な象皮病・甲状腺腫・エイズの患者さんたちの多いことでした。里子の家族にもこれらの病気で苦しんでいる人達が多いのです。患者さんたちの前で何もすることの出来ない無力さは本当に耐え難いものです。クリニックで病人の方々ために死に物狂いで働くシスター達とスタッフの方たちに心からの敬意を表わしたいと思います。(表紙の写真参照)

エチオピア文化を象徴する一つとして、「コーヒーセレモニー」を紹介したいと思います。人々が集う時やお客様の歓迎にこの儀式が行われます。私達の送迎にも修道院で「コーヒーセレモニー」が行われました。エチオピア人の修練者達が美しく着飾って、炭を熾し、コーヒー豆を煎るところから始まり、全員がコーヒーを楽しむところまでの儀式が荘厳に行われました。日本の茶道と共通するものを感じ、とても感動し

ました。エチオピアの娘さんが教養の一つとして身につけていなければならないものの一つだそうです。(表紙の写真参照)

嬉しいこともありました。吉田永子様の里子として優秀な成績で卒業し、結婚して母親になり、働いているメイサ･テゼニー・マモが赤ちゃんにワクチンを打つ為にクリニックに赤ちゃんを連れて会いに来てくれました。
目のくるくるした、元気そうな赤ちゃんを見て皆大喜びでした。教育の大切さを改めて痛感しました。

感謝のお知らせ

1) エスナックの支援によって、エチオピアの里子達には毎年一着の服と靴、学用品を支給。(古着も3代にわたって使われていました)。一番嬉しいことは**毎日の**放課後の食事です。一年に3回山羊の肉の給食。(殆どの家庭では一日一食食べられない)
私達の訪問のお祝いに今年は4回肉の給食でした。(表紙の写真参照)

2) 創立初期からのエスナックの恩人、松本淑子様の遺産の一部でエチオピア･サッコに、エスナックの子ども達の給食センターが建設されることになりました。

3) 里子への支援金の一部を積み立てて、トタン屋根の家が多く建てられていました。藁葺の家(マナハウス)は、野獣や雨に悩まされていましたので、「エスナックハウス」と呼ばれ、とても感謝されていました。(表紙の写真参照)

4)「わかち合いの泉基金」で建設した「少年の家」では少年たちが自立して生き生きと生活していました。とても感謝して勉強していました。(表紙の写真参照)

お知らせ

２０１２年から、アフリカのコーディネーターは
マリア援助会・アフリカ管区の管区長 (今はシスターステラ) にお願いすることになりました。エチオピアのサッコ･コンチ･アラモ、 ケニアのナクラには、里子の世話をするシスター達が、コー･コーディネーターとして働いてくださっています。

アフリカ
コーディネーター
シスターステラ
と
BOMの初代(1982)
コーディネーター
シスター
アナンダラータ
(アフリカ訪問中でした)
と共に

サッコの谷に歌は響いて

原口 友也

エチオピアに着いた翌朝、サッコという谷間の小さな村を目指した。首都アディスアベバから緑に囲まれたガンベラ空港まで飛行機で約２時間。刺すようなアフリカ独特の日差しの中、整備されていない道を車はどんどん走る。最初は赤土の埃が舞う程度だった道は進むごとに険しさを増して、ドライバーは神業とも思えるようなハンドルさばきで岩を乗り越え、穴ぼこをよけていく。激しい揺れに尻や頭を打ち付けながら、到着するころにはもうすっかり日が暮れようとしていた。**日本からは想像できないほど遠く離れた谷間の、エチオピア人でもその地名を知らないような小さな村、それがサッコだった。**

滞在させてもらうことになるシスター達の家に着いてまず待っていたのは、子ども達の歌と太鼓による手厚い歓迎だった。もちろん言葉までは分からないが、その躍動感のあるリズムと真っ直ぐな歌声に旅の疲れも吹き飛んでしまう。**(表紙の写真参照)**

インドから来た修道会のシスター達がその周辺の人々の面倒をみるようになってからもう 15 年ほど経つというが、初めてその場所に来た時には大変なショックで、タフな彼女達ですらも涙を流さずにはいられなかったという。成程、無理もない。今でこそシスター達の住まいには電気も水も引かれているが、当初は本当に何もなかったのだろう。それに普通の家々には今でもそんなものはないのだ。ときに子ども達は歩いて水を汲みに、薪も集めに行かなくてはいけない。暗い夜道には野獣に襲われる危険だってある。蛇口からいつでも温かいお湯が出るのとはまるで違う生活がここにある。

敷地内に隣接して建っている**幼稚園、小学校、診療所などを見せてもらうことになった。**まずは**幼稚園**。驚いたことに、この周辺で使われているオロモ語の他に、もう既に英語を勉強しているのである。それもかなりのお手前。クラスに入ると小さな子ども達が ABC や身体のパーツなどを大きな声で読み上げて日々の成果を披露してくれた。おいおい、日本のちびっ子よりも余程進んでるじゃないか。**(表紙の写真参照)**

診療所でも驚きが待っていた。その日、診療所に訪れていた老婆は歩くこともままならず、木製のイス型の担荷に乗せられ、片道１時間半の山道を村の男衆達に交替で担がれてきたのだ。その老婆は自分の病気を診てもらう金にも困っているとシスターから聞かされ、戸惑いながら小額のお金を差し出してみると、真剣な眼差しでこちらに何かを訴えている。彼女は「あなたに神の祝福を！」と言ってくれているのだった。**(表紙の写真参照)**

そして、**この小学校には** ESNAC の里子が 200 人もいる。里親さん達の援助は制服や靴、文具などの配給に充てられるが、何よりも大きいのは給食だろう。学校で食べている子どもは、家では何も食べないそうである。一日一食食べられるというのはかなり恵まれたこと、そのくらい貧しい地域なのだそうだ。

日本から珍客が来ているということで、このサッコの小学校と、10km ほど離れたカロの小学校の生徒による合同祝賀会が催されたのだが、これには本当に圧倒された。確かに、子ども達の生活は日々苦しいものかもしれないが、このときばかりにと歌や踊り、芝居や詩の朗読などでそれぞれにエネルギーを爆発させている。それに触発されるように、最後には日本人も入り交じり、歌い、踊った。今の日本の小学生にもこ

のくらいのパワーが眠っていると信じたい。(表紙の写真参照)

他にも、今回の旅を通してエチオピアとケニアが抱える色々な現状を目の当たりにした。象皮病で変形した患者さんの足、(表紙の写真参照) 痩せこけて皮だけの赤子の尻、溢れんばかりの難民キャンプ、天涯孤独の孤児たち。でも、その人達も遠い場所で同じように生きていること、そしてその人達のためにひたすらに奔走しているシスター達の献身振りに、本当に胸が揺さぶられる思いだった。

成田空港から京成線に乗りながら、地面がこんなにも平らなことに改めて驚く。街に土埃は舞っていない。アスファルトの上を服を着た犬が歩いていく。自宅に帰って蛇口をひねってみると、直ぐに温かいお湯が出てきた。水が流れる音の奥で、サッコの谷で聴いた子ども達の歌と太鼓が響いていた。

アフリカ訪問記

中村　淳

今回エチオピアのエスナック・ケニア現地訪問の機会をいただきました。あまりに貴重で、また多くの体験であったためその全てを書くことができないことをお許しください。

エチオピアの首都であるアディスアベバから飛行機でギャンベラまで行き、その後車でエスナックの活動地であるサッコへ。前回の訪問時は大変な車の旅だったそうですが、今回は道の一部が整備されていて以前より随分快適な道を行くことができたとのこと。ここで多くの子ども達から素晴らしい歓迎を受け、私の里子とも会うことができました。子ども達はみな着る服もないような大変な貧しさですが、何より感動したのが家族にエスナックの里子が一人いれば、その子の衣類などを使い回すことで一家全員が助かるということです。さらにシスター達が毎年お金を積み立てて家を作ってあげたりと私たちの些細な援助がこれほどまで多くの貢献をしているとは非常に大きな驚きでした。

その後サッコからさらに離れた山奥であるラガロミという場所に行きました。ここは、旱魃で住めなくなった地域から政府によって強制移住させられたイスラム教の部族が 4,000 人集まってできた村であり、エスナックの活動地ではありませんが、全てを政府からの配給で賄う（それもあと 3 ヶ月で途絶えるとか）というそのあまりの貧しさゆえにシスター達が緊急援助物資を送っている場所です。このように宗教を越えたシスター達の活動に大変な感銘を受けました。中には学校があり、12 歳くらいの生徒が 1 年生のクラスで喜んで学んでいた姿もありました。貧しい中にも人々の心の温かさを感じました。(表紙の写真参照)

その後はカッロ（ここも同じく 7,000 人が強制移住させられたイスラム部族の村）に行きました。ここも大変な貧しさですが、シスター達が毛布を配給したりとその活動に大きく感謝していました。このようにこの地球上には多くの貧しい場所がたくさんあるのだということを知りました。(表紙の写真参照)

次にエスナックの活動地であるコンチへ。ここでも多くの子ども達が歌やダンスで私たちを迎えてくれました。年に 3 回肉料理を食べられる(復活祭とクリスマスに)子ども達は私たちの歓迎の為に特別にその日は肉料理をご馳走してもらい、私達の顔を見ながらその顔は喜びに満ちていました。(表紙の写真参照)

ども達は私たちの歓迎の為に特別にその日は肉料理をご馳走してもらい、私達の顔を見ながらその顔は喜びに満ちていました。**(表紙の写真参照)**

アディスアベバに戻り、エスナックの里子達が遠くアラモという大山奥からはるばる私たちに会いに車で来てくれました。生まれて初めて見る大都会に、日本から来た里親さん達に会いに行くというのはどんなに嬉しいことだったろうと思います。

今回はエチオピアだけではなくケニアに行くことができました。ケニアのナクルには多くの捨てられた栄養失調の孤児がいました。しかしシスター達が愛のあふれる環境で子ども達を育ててくれていました。

終わりになりますが、このような貴重な訪問の機会を与えてくださったシスター藤田をはじめ、現地で私たちの世話をしてくださったシスター達、私たちをあふれる愛で歓迎してくれた子ども達や道中出会った全ての方達、動物達、一緒にこのような素晴らしい旅を同行してださった浜田さん田渕さん友也さん、日本のエスナックの里親様、そして日本で私の帰りを待っていてくれた家族と私の帰国を待って亡くなった伯父に心から感謝いたします。

(注：成田空港に着いた時、中村様のたった一人の伯父様が帰天されました。
心からご冥福をお祈りさせていただきます。)

エチオピア･ケニアを旅して

浜田　スミ子

念願だったエチオピアの里子を訪ねる旅が実現し、アディスアベバの空港に降り立った時は、本当にアフリカに来たのだとの感動を味いました。アフリカの体験は想像をはるかに超えるものでした。ここで何からお伝えできるかと迷っています。

貧しい身なりの子ども達の眼差し、大人達の人なつっこい笑顔！最貧国とは思えない緑溢れた大地、木々、すばらしい景色。見事に育っている作物などを目にした時、一日一食も食べれないということが、どうして？との思いに駆られました。原因は色々あると思いますが、やはり気候によるものが大きいのでしょうか。

サッコの修道院の玄関に小さな小さな赤ん坊を抱いた母親が来ました。夕方の寒さの中、夏物の半袖の服、裸の赤ん坊は骨が見える程。私達の持っていた冬着や少しのお金を包んで渡しましたが、感謝しながら赤子を抱いてゆっくりとした足どりで帰って行った後ろ姿が今でも目に焼きついています。**(表紙の写真参照)**

でこぼこ道を車が通ると、マナハウスといわれる草ぶきの家から子ども達が裸足で飛び出してきて手を振る好奇心にみちた、くるくるとした目に心が和みました。

大きな薪束を背負ったおばさん達、横に長く束ねた薪を背中を丸めながらやっと歩いている様子。いったい何キロの道を歩いて帰るのやら！一束が日本円で 80 円位とのこと。私達が景色を見るために車から降りているところに、道の向こう側から車の危険をものともせずに渡ってきて手を差し出す。日本円で 40 円くらいのビル札をあげるととても嬉しそうな表情をして頭を下げました。**(表紙の写真参照)**

エチオピアの隣国ケニアは生活が安定している様子が感じられました。作物も年間を通して栽培され、輸出までしているファームに案内してもらいました。しかしここにはエチオピアとは違った形の貧困がありました。養護施設には親をエイズなどで亡くした孤児、トウモロコシ畑に捨てられていた子ども達がシスターの保護の下に安全

に与れない子ども達が里親の援助を必要としているのです。帰国して、多くの人に里親になってくださるようにお願いしたいと思っています。

エチオピアは、来月からの六ヶ月にわたる乾季には今の青々とした緑は姿を消し、一面茶色に変り、人々は枯れ草で飢えを凌がなければならない日もあるということをシスターからお聞きし、日本では考えられない生活の厳しさに胸が痛みました。

私の里子ガラム君が、15キロ離れたところから母親と一緒に会いに来てくれ、**感動の対面をしました。**後で思い立って、15キロ車で彼の家を見に行って帰って来ることが出来ると日本式に考えてシスターに連れて行っていただけないかとお願いしたところ、『車で行けるような所ではない。あなたの足だと一日かかる』と言われ、思わず溜息が出ました。ちなみに里子のガラム君は、毎日片道2時間歩いて通学しているとのことでした。

2週間の旅は本当にアット言う間に過ぎました。沢山の体験、見聞きした色々なことが頭の中を駆け巡っています。早くも次のアフリカ訪問を考えています。
今回の旅行を通して、日本がいかに恵まれているかとつくづく知らされました。今回の旅行を計画してくださったシスター藤田に感謝申し上げます。

アベベに会えたエチオピアの旅

田渕佳英子

私は昨年の秋、エチオピアのアベベ少年の里親になった。一年経たずしてこの10月、エスナックの現地訪問で本人と会う機会を得た。年の割に小柄な少年は　初め少しシャイな子のように思われたが、宿舎で一緒に遊ぶうちに、私の近くに来るようになった。翌日、私たちがケニヤへ発つ飛行場へ見送る子ども達の乗る車の助手席にアベベと座ることになった。会話こそなかったが、彼の境遇を考えるとかわいそうで一層いとおしく思われ、私は両手で彼の小さな冷たい手を包み心温まるひと時をもたせていただいた。

昨年エスナックから送られてきたアベベの家族歴は「母親は既に亡くなり農作業をする父親が７人の子どもを育てていて、アベベは末っ子である。兄姉６人誰も学校へ通っていなく、仕事にもつけていない。生存の保障もなく支援が必要」と。私はこの一家を援助したいという気持ちになり、今回アベベの家族への支援物資を多くの知人によびかけたところ沢山の衣類等の提供を得、飛行機の重量制限３７キロに絞り込むのに悩むほどだった。

今回　担当のシスターから、アベベは父も亡くなり兄姉も結婚で家を出て、兄と４人で暮らしているという状況変化があったことを知らされた。

10月はエチオピアのもっとも美しい時期にあたり、飛行機から見渡す山々は緑に被

今回　担当のシスターから、アベベは父も亡くなり兄姉も結婚で家を出て、兄と４人で暮らしているという状況変化があったことを知らされた。

10 月はエチオピアのもっとも美しい時期にあたり、飛行機から見渡す山々は緑に被われていたし、今回お世話になった修道院の中庭にも様々な花が美しく咲いていた。移動中の車窓からもトウモロコシや豆など多くの野菜が豊かに実っているのが見え、食糧不足の現実がピンとこなかった。しかし乾期を迎えると大地には雨が一滴も降らず緑が消え景色は一変し、枯渇することを知った。

ニューヨークでテロがあった同じ日、エチオピアでは飢餓で 300 万人の死者が出たと聞く。今年も隣国ソマリアとエチオピア東部で干ばつによる甚大な被害が出たが、エスナックの子ども達の地域は免れた。この旅で過酷な自然や貧困による病等、アフリカの現実の一端に触れ重い気分になることもあったが　楽しい経験も沢山あった。

車で移動中　車窓から手を振ると、きさくに返してくれるフレンドリーなエチオピアの人々。私は 200 回以上も手を振った。左手を添えて右手を差し出すポーズをとる人がいる。旅の安全を祈願する意味だと知り、感動した。(表紙の写真参照)

エスナック・「わかち合いの泉基金」で建てた「少年の家」で勉強する青年や子ども達は、大きなパンや花束で私達を迎えてくれたり、**サッコやコンチの学校では、歌や踊りや寸劇を披露してもらい最後には私達も一緒に踊り盛会となる等、多くの歓待を受けた。それは修道院での宿泊も含めシスターの全面的なサポートがあって得られた内容だと思うと共に、エスナックの地道な活動が背景にあることをこの旅に感じた。そしてエチオピアが気になる国になった。**

NEWS

★　BAN（インド･バンガロール）のコーディネーター･フェリックス司教が重病で去年から３回目の手術を受け、入院中です。

『アフリカの旅を祈っています。里子達は良く勉強しています。退院して、やっと里子の手紙を訳して送る準備をしていますので、里親さんによろしくお伝えください。まだ座ることが出来ないのでベッドで働いています。』

とのメールを 10 月に受けました。 その直後に３回目の入院の知らせが来た後音信が途絶えています。どうぞお祈りくださいませ。

★　SYL(バングラデシュ･シレット）の元コーディネーター･ディリップ神父がオブレート修道会のバングラデシュの責任者に任命されました。
ご健康でこの重責を遂行されますようにお祈りくださいませ。

★　バングラデシュ･シレット地方は カトリック･ダッカ教区でしたが、信徒の数が増え、カトリック･シレット教区として独立しました。40 以上もの山岳民族の殆どを抱えるシレット地方でのオブレート会の司祭たちの働きの成果だと思います。初代司教はオブレート会のビジョイ･デクルーズ司教が任命されました。

事務局便り

☆　イエス様の誕生祝い

エスナック教育里親グループの創立記念日であるこの時期に毎年里親の皆様と「エスナック創立　感謝の集い」のご案内をさせていただいております。今年はエスナック便り 57 号でご案内しましたとり、12 月 10 日に四谷の岐部ホールにて開催いたしました。
毎年皆様とともにお祝いできますことを心より感謝しております。

☆　**感謝します**

払込票通信欄に多くの皆様から励ましのお言葉や季節のご挨拶などが記され、スタッフ一同いつも嬉しく思っております。お一人おひとりの皆様にお返事できず、申し訳ありません。この紙面をお借りして心から感謝もうしあげます。
心温まるお便りに励まされ、毎日事務局の仕事に励んでいます。

☆　**里親番号明記のお願い**

お問い合わせには里親番号を必ずお知らせ下さい。1200 人の全里親様のお名前を把握することは困難です。事務作業円滑のため里子番号、里親番号をご記入くださるようご協力重ねてお願いいたします。

☆　養育費ご入金状況のおしらせ

毎年 2 月、里親の皆様に前年 1～12 月にご入金いただいた、養育費をお知らせしております（12 月末現在の）。お手元に届きましたらご確認をお願いいたします。
尚、養育費自動引落しの方はお通帳でご確認をお願いいたします。

☆　里親さんを紹介してください

事務所で 900 人もの里子が里親さんを待っています。里親さんに辞められた里子や、新しく依頼されている子ども達です。支援会でその子ども達の養育費を支払っていますが、限界がありますのでご協力よろしくお願いいたします。

里親さんを待っている里子達のために皆様のご協力を
よろしくお願いいたします！

新しい里親の申し込みは　？？

＊　里親さんからの紹介
＊　エスナック･ブログ

＊　エスナック･ホームページ
＊　藤田の著書「LOVE! アシュラムの夢を追い求めて」「あの輝いた瞳を」
　（各本の中に**『エスナック会員申請はがき』**が入っています）
＊　新聞の記事
　講演会やフェスティバル

里親の声

＜妹を思って、里子との縁を大切に＞

私は現在、インドのキラリシュ・ビリヤさんの里親となっています。ビリヤさんの意向はわかりませんが、出来れば上級の学校（進学）して勉強して欲しいと思います。

私は現在６２才で昨年３月に定年を迎えましたが、再雇用となって働いています。健康でもありこの後も働き続ける予定です。

エスナックからビリヤさんを紹介され、いただいたお手紙の中に経歴と写真が入っていました。写真を見たとき、妹を思い出したのです。私の妹は昭和３１年３月１３日、他界しました。５才でした。私が６才。北海道の開拓農家から東京の母の実家に里帰りの時でした。二人とも赤痢にかかり医者は「残念だが二人とも助からない」といったそうです。峠の夜を越した早朝、妹は旅立ち、私は奇跡的に命を取り留めました。おとなしくてやさしかった、記憶しかなく、たった１枚の写真しかありません。比べても似ている訳ではないのですが、ビリヤさんの写真に妹を突然思い出した次第です。輪廻転生、という言葉を信じるような人間ではありませんが、何かの縁を感じたのだろうと思っています。幸い、元気で働き続けられるし、家、車を含めて借財は全くありません。普通のサラリーマンでしたから財産はありませんが、相応の支援、仕送りは可能です。

どうかビリヤさんが望むところまで勉学を支援したいと思います。

写真を見ると、聡明で、将来きっと、彼女の国や社会のために働く力を持っていると思います。よろしくお願いします。　（W 様より）

＜里子を愛の絆として＞

カトリック新聞で、バングラデシュのコーディネーターの神父様と同じ修道会であるオブレート会の日本（四国）のブラザーの紹介記事を読みました。その方は、社会福祉につながる修道会への献身を決意されて、「最も貧しい人々、最も見捨てられた人々のために」を会の精神とする「汚れなきマリアの献身宣教修道会」（**オブレート会**）に入会されたそうです。

私はバングラデシュに行ったことはありませんが、エスナックフェスティバルで来日された神父様方にお会いしました。**言葉は通じなくとも、その謙虚なお姿に、貧しい人々のために日夜献身されていることを感じ、深い感動を覚えました。**

2000 年前に、この世に人々を救うために来られたキリストは、今日も従う人を通して苦しむ人のために働いておられます。**私にとって、里子との出会いは、多くの人と結ばれるための神様からの贈り物でした。**

（K 様より）

私たちの里親になってください!!

エスナックの里子は現在 2,500 人です。
（内、神学生 110 人・大学生 290 人）
里親の皆さんに感謝し、希望を抱いて学んでいます。

大勢の子ども達が、あなたの援助を待っています

インド・バングラデシュ・アフリカの恵まれない子ども達を助けてください！

孤児院の子ども達と（ケニア）

◀社長こと
フランシス君
お尻は骨と皮だけ
（P.3）

サコの歓迎会

一食分（ケニア）

サコの里子達と

マリアの援助修道会　アフリカ管区長館の前で

ケニア・ナクラの
サバンナで

里子達との食事
（一年3回の肉料理で
大喜びの日）（P.4/6）

200人分の食事を
作る台所小屋
―ひどい煙の中で!

エチオピアのマナハウス
（草葺の家）雨と野獣に
襲われます

コーヒーセレモニーの
お手前（P.4）

歌いながらコーヒーを
待っています（P.4）

象皮病のお母さん（P.3）

サコの小学校（1500人）での
歓迎式

クリスマスカードを作る
婦人たち（バナナの皮で）

歓迎の式（P.4）

エチオピア・デンビドロの少年の家（「わかち合いの泉基金」で建てられた）（P.4）

少年の家の台所

薪を運ぶ婦人たち（P.7）

飢えに苦しむ母と子（P.7）

エチオピアの救急車（P.5）

里子達の家庭に贈られた『エスナック』ハウスと今までのマナハウス（P.4）

難民キャンプ
（エチオピア・コンチ）
（P.6）

一年生のクラス訪問
（P.6）

ドラムと歌で歓迎
（サコの幼児クラス）
（P.5）

エスナック教育里親グループ

Educational Sponsorship of Needy Asian & African Children

（アジアとアフリカの子どもたちに教育をおくる会）

〒399-0214　諏訪郡富士見町落合富里 9984-412

代表　藤田文子

TEL：0266-62-2322　FAX：0266-62-2334

E-MAIL: esnac@asahi.email.ne.jp

HOME PAGE: www.ne.jp/asahi/esnac/ngo

ブログ：http://esnac.blog96.fc2.com/